

クロニカ(5) — 儚さのクロニスタ、セシリア・メイレーレス

CRÔNICA(5) — Cecília Meireles, a cronista do efêmero

エレナ・トイダ
Helena H. Toida

O presente trabalho dá continuidade à série de estudos sobre a crônica, este gênero *sui generis* da literatura brasileira, que vem sendo desenvolvida a partir dos meados do século XIX e que se consolida na primeira metade do século XX através dos trabalhos de Rubem Braga, único escritor que entrou para a história da literatura brasileira como cronista.

Na mesma linha da abordagem de cronistas que contribuíram para a consolidação da crônica, analisaremos desta vez uma cronista, que na realidade vem a ser uma das maiores poetisas da literatura brasileira moderna, Cecília Meireles.

Ao lado de sua grande produção poética, Cecília deixou também inúmeros trabalhos em prosa, estes podendo ser classificados muitas vezes como poesia em prosa. Uma exímia observadora do mundo e dos homens com extrema sensibilidade nata, não tardou para que Cecília começasse a escrever crônicas, nas quais notamos surgir uma verdadeira repórter dos acontecimentos do cotidiano.

A escolha cuidadosa dos temas e do vocabulário que constituirá suas crônicas faz o leitor enxergar, sentir, refletir e se divertir através da sua visão, muitas vezes sendo uma leitura aparentemente “fácil”, mas de uma grande profundidade que leva o leitor a redescobrir o mundo e a si próprio – função primordial da literatura. Nem por isso, Cecília se põe na posição de conselheira; ela expõe apenas ao leitor um outro ângulo de visão, resultado de sua sensibilidade perante o mundo dos homens e da natureza, que muitas vezes pode estar encoberto por injustiças,

violência e perda de dignidade.

Através da análise de algumas crônicas, tentaremos apresentar suas características, necessárias para podermos entender um pouco dessa grande literata, cujas obras inéditas ainda se encontram em fase de publicação.

はじめに

本稿は以前より発表している拙稿¹の続きとするものである。ブラジル独自のジャンルである「クロニカ」の起源や先駆者、また代表的なクロニスタ²について既に考察を重ねてきた。文学者であれば、そのほとんどがクロニカを何編か書くにいたる。それほどこのジャンルはブラジル文学の中に浸透しているのである。以前にも書いたが、崇高なる文学作品としての立場ではなく、読者により近い場所から、なお楽しませ考えさせ癒すという文学の役割を担っているこのジャンルは、多くの文学者の興味を引くのであろう。このジャンルが持つ困難な点は、時間の腐食に勝てないことが多々あるということだ。しかし作品群の中には、時をも超越し、普遍性を維持するものもある。それらの多くは歴史的事象を飛び越え、遠い過去から現代に向けて警鐘を鳴らす役割を担うのだ。

アントニオ・カンディド (Antonio Candido)³のような著名な文芸評論家が既にクロニカの定義と位置づけを明確にしているが、なかでも本稿で取り上げるセシリア・メイレーレス (Cecília Meireles) の姿勢をもっとも的確に表現しているのがダヴィ・アヒグッチ (Davi Arrigucci Jr.)⁴の定義である。

-
- 1 トイダ、エレナ「クロニカ (1) - ブラジル文学における独自のジャンル」、『上智大学外国語学部紀要』第36号、2001年、pp.133-147
—「クロニカ (2) - 20世紀初頭のクロニスタ、ジョアン・ド・リオ」、『上智大学外国語学部紀要』第38号、2003年、pp.131-149
—「クロニカ (3) - 叙情のクロニスタ、ルーベン・ブラガ」、『上智大学外国語学部紀要』第41号、2007年、pp.131-149
—「クロニカ (4) - ありふれたもののクロニスタ、フェルナンド・サビーノ」、『上智大学外国語学部紀要』第43号、2009年、pp.243-259
 - 2 cronista クロニカを書く人のことを指す。
 - 3 「クロニカ (1) - ブラジル文学における独自のジャンル」参照
 - 4 Davi Arrigucci Jr. 現在ブラジルでもっとも重要な評論家

日常の予期せぬ出来事をとらえようとするジャーナリズムに鍛えられたクロニスタの眼は、瞬間をとらえるためにスタンバイしている。クロニスタは、いくなれば、時の流れの抒情詩人だ。

クロニカの確立にもっとも貢献したルーベン・ブラガのコメント―「シンプルな言葉ほど心に響く。単純なものほど美しい。」―はまさにこのジャンルを明確に定義しているとも言える。また井上ひさしも「むずかしいことをやさしく、やさしいことをふかく、ふかいことをおもしろく、おもしろいことをまじめに、まじめなことをゆかいに、ゆかいなことをいっそうゆかいに」と常に言及していたが、このような要因はセシリアの作品の根底にも息づいている。彼女の出発点は韻文だったが、前述したようにクロニスタが「時の流れの抒情詩人」だとすると、セシリアのクロニカはまさに散文詩ということになるのであろう。

セシリア・メイレーレスは20世紀のブラジル近代文学において、もっとも重要な女流詩人である。では、なぜ詩ではなく、クロニカを分析の対象として取り上げるのか。それは、彼女の「儂さ」が散文においてどのように表現されているのかをあらためて探ることにある。セシリアは持ち前の強い感受性を駆使して、そのほとんどが散文詩ともいえるクロニカを書いている。文体は決して堅苦しくはないのだが、何気ない言葉の一つ一つが却って作品の深さを際立たせる。一見他愛ないことについて描写しているのだが、その行間には様々な想いが見え隠れするのである。次の詩の一節にセシリアの決意がうかがえよう。

もう星も海の形もあなたさえにも関心はない。

時の中より私だけの詩を紐解く―

蟬への羨望もない―私も死ぬまで詠うからだ

(「受諾」“Aceitação”)⁵

この世紀に生まれ生きたことは、近代化の波にのまれてめまぐるしく変貌する世界をセシリアが目当たりにしたことを意味する。そして、彼女

5 *Melhores poemas*, p. 17 に収録されているが、初出は受賞作品 *Viagem*

こそ近代化がいかに人間の尊厳を脅かす存在かということに警告を發し続けた一人でもある。彼女の作品の根底に流れる儂さのしくみと、人間を取り巻くすべてのものやことに対する慈愛の眼差しが、どのように作品の中で展開されていくのかを探ることが本稿の目的である。

セシリア・メイレーレスとは

セシリア・メイレーレスは1901年、当時のブラジルの首都リオデジャネイロに生まれ、同市で1964年11月9日、創作活動の絶頂期にありながらその生涯を閉じる。生まれる3ヶ月前に父親は他界、そして3歳になる前に母親とも死別するが、ポルトガル、アソーレス島出身の母方の祖母の愛情を一身に受けて育つ。これについては後に、主人公とその祖母そして乳母といった登場人物たちを、慈愛に満ちた眼で描いた自伝的児童小説『猫のおめめ』(*Olhinhos de Gato*)で触れているが、彼女にとって死はとても身近な存在であったにもかかわらず、マイナス要因である両親の死をプラスに変えていく強さが育まれたことは想像に難くない。そしてこの事実は、彼女の文筆活動—それが詩であれ、散文であれ—に大きな影響を与える。ある雑誌のインタビューで彼女は次のように述懐している。

(両親やほかの家族の死は、経済的に苦しくなったりもしたが同時に) 小さな頃から私は死と親しくなったのです。そこから儂さと永遠の関係を学ばせられました。多くの人にとって同じ学習が痛みと、ともすれば暴力を伴うものですが。私の人生において、何かを得るために努力をしたこともなければ、また失うことに驚愕することはありませんでした。すべては儂いのだという認識、また感情が、私の性格を決定付けた要因なのです。それが多分私の文筆活動—文学、ジャーナリズム、教育、民俗学—の根底にあるものです。人間の多くが支配されてしまう、一種の夢遊病から離脱させること、生きることを深く説くこと—これが私の意図するところです。しかしそれは哲学的な意図でも救いでもありません。ただ温かく見守る思いやりをそこに表現したいだけなのです。

(1953年10月3日付け「マンシェッテ」(*Manchete*)掲載)

セシリアは1910年の小学校卒業の際、当時の教育委員オラヴォ・ピラッキ (Olavo Bilac)⁶より、優秀な成績を取めた生徒に送られる金メダルを手渡される。ピラッキは高踏派を代表する詩人だが、その中に「老いたる樹木たち」という作品がある。使命を終えた老木が若い木々に未来を託して枯れていく様が描かれているのだが、それはまるでセシリアの未来を象徴するかのようにも思える。奇しくも28年後彼女はピラッキの名を冠する賞をブラジル文学院より送られることになるのだ。人生にはこのような偶然にしか思えない遭遇も後になって大きな意味を持つものだと、改めて実感させられる。

1917年に師範学校を卒業した後、母親と同じように教職につき、常に教育に対する努力を惜しまない姿勢を貫いた。1927年には『わが愛する子供よ』(*Criança, meu amor*)を出版したが、後にこれは学校の教材として使用されることになった。しかしその最たる業績は、1934年ブラジル初の児童図書館の設立であった。このような業績をはじめ、教育に関する様々な論文を発表し、改革に携わっていく姿勢は、セシリアの確固たる信念を物語るものである。

セシリアは、19世紀末の象徴主義の影響がまだ色濃く残る処女詩集『スペクトル』(*Espectros*)を1919年に出版、膨大な作品群の第1歩が始まる。モダニズム運動が高揚する最中、その影響も受けながら彼女の才能も大きく開花していくのである。1922年サンパウロで開催された近代芸術週間 (*Semana de Arte Moderna*)を軸に、近代主義を提唱する詩人や小説家が数多く輩出される中、セシリアはそれに属さず数年後には独自のスタイルを展開させながら創作活動を続けていく。

1922年ポルトガルの造形作家と結婚するも、自殺という形で夫を失うことに。この出来事もまた前述したセシリアの儂さに対する姿勢に深い影響を与える。3人の娘に恵まれ、後に三女の MARIA・フェルナンダがセシリアの遺作をまとめる作業に携わり、ブラジルだけでなく海外にも普及することに努めている。無数の多岐にわたる作品群はいまだ未発表のものが多く残されているといわれ、今後も優れた作品の発表が期待されている。

1938年、詩人としての成熟期を迎えるにいたった詩集『旅』(*Viagem*)で、

6 Olavo Bilac フォルムと韻を重要視した19世紀末の文学の流派、高踏主義 (パルナシアン)の代表詩人。

ブラジル文学院 (Academia Brasileira de Letras) のオラヴォ・ピラッキ賞⁷を受賞、絶賛される。また死後に全作品を対象として同院よりマシャード・デ・アシス賞 (1965年) を贈られる。詩集のタイトル通り、セシリアは世界各国を訪れている。祖母の故郷アソーレスを含むポルトガルに始まり、メキシコ、アルゼンチン、モロッコ、ヨーロッパ諸国、インド、ゴア、イスラエルを旅する。様々な文化に触れ刺激を受けながら、より精力的に創作活動に打ち込むことになる。中でもインド (旅行記を編集) や東洋に深い関心を示し、タゴールを翻訳したり、芭蕉に言及するクロニカ (後述) も書いたりした。

類まれなる才能を開花させたセシリアは、詩を筆頭に、クロニカ、散文詩、叙事詩、翻訳、演劇、民俗学、エッセイ、旅行記、講演集、児童文学など、多岐にわたる作品を残した。生き急いだともいえる45年の執筆活動の軌跡を辿ると、セシリアの人間そのものに対する真摯な姿勢が読み取れる。まさに絶頂期であった60代半ばでその生は終わるが、彼女の生き様そのものが読者を魅了し、今なお読み継がれているのだ。以降クロニカを中心にその軌跡の一部を紹介したい。

セシリア・メイレーレスのクロニカ

クロニカというジャンルにおいて多く扱われる日常のスケッチが中心だが、セシリア独特の感性と巧みに選ばれた言葉で織り上げられている作品には、どんなに些細な出来事が扱かれていたとしても、そこには人間への尊厳と慈愛に満ちていることが理解できる。

「セシリアは鋭い観察眼の持ち主である。もし詩の本質を我々に植え付けることができなかつたとしても、その詩人の眼を通して、私達に見ること、感じる事、変化させ愛することを教えてくれるのだ。」とは、カルロス・ドゥルモン・デ・アンドラーデ (Carlos Drummond de Andrade)⁸が『夢を選んで』に付した解説であるが、この姿勢は彼女の創作活動に一貫して表出している。

7 オラヴォ・ピラッキ賞を受賞したセシリアは小学卒業の折に、彼の手よりメダルをもらったことがあるのだが、これも偶然の廻り合わせにしては因縁さえも感じさせる。

8 Carlos Drummond de Andrade 20世紀のブラジル文学韻文の最高峰

本稿で扱うクロニカは、1963年ホケッテ・ピントラジオ局 (Rádio Roquete Pinto)⁹ の番組「街の声」(Vozes da cidade) で紹介された作品である。つまり、聴くクロニカなのである。リスナーの聴覚に呼びかけるというこの行為は、クロニスタにより高度なルポルタージュ・スタイルを要求するともいえるのではないか。これにはカルロス・ドゥルモン、マヌエル・バンデイラ (Manuel Bandeira)、ハケル・デ・ケイロース (Raquel de Queirós)¹⁰ が寄稿している。

セシリアのクロニカの特徴を探るために、ここでは2冊のクロニカ集—『夢を選んで』(Escolha o seu sonho) と『魔法の窓』(Janela mágica)—に収録されている作品群から抜粋する。

「神聖なる芭蕉」(“O divino Bachô” p.10-12)

日本古来の世界—短い「詩」—俳句—は多くの西洋人を魅了した。セシリアもその一人であり、「同じ」詩人だということで、芭蕉に親近感を覚えていたのではないか。この作品からは、彼女が俳句の性質をかなり深く理解していたことがうかがえる。ここで彼女は俳句には日本人でなければ理解できない世界観があり、多言語に訳すことは不可能であると述べている。芭蕉の「古池や」のポルトガル語訳を用い、その小さな世界で起こる「一瞬と永遠の接触」から導き出される「真実への開眼」を通してこの俳人の偉大さを説明している。芭蕉の弟子の其角が作った「赤とんぼ 羽をとったら 唐辛子」という句を、芭蕉は「唐辛子 羽をつけたら 赤とんぼ」と直したという、東洋では有名な師弟のこのやりとりに触れながら、300年も昔の「詩」がこの我々の野蛮な世界において人々を感動させる力を持っていることを絶賛する。なぜなら今日の我々の世界は深く恐ろしい闇に覆われているから、ここに見られるささやかな同情の表れに希望を見出すのだと結ぶ。セシリアは人間に対する希望は、それほど大層なものではなく、本当にささやかな優しさで支えられるのだと信じている姿勢がうかがえるクロニカである。

9 Rádio Roquete Pinto は、1922年開局のブラジル初のラジオ放送局。当時から教育に強い関心をもっていたホケッテ・ピントの努力による。現在の文部省ラジオ局。

10 Manuel Bandeira 近代芸術週刊の主催者の一人、日常とありふれたものを文学のテーマとして復活させた
Raquel de Queirós 地方文学の代表的女流作家

「^{すべ}幸せになる術」 (“Arte de ser feliz” p.20-21)

この作品は「私」の窓から見える幻想的な風景で構成されている。シャレーの上に青い陶磁器の卵の形をした飾りがあり、そこに真っ白い鳩が止まると、卵と空が溶け合って、鳩がまるで空中に静止しているかのように見える窓。運河に開かれた窓では、舟いっぱい積まれた花を受け取るのは誰なのか想像するだけで幸せになれる「私」。大きく枝葉を広げるマンゴーの木陰で子供達にお話を聞かせる女性。チョークで描かれたパステル調の小さな公園でわずかな水を植物に与える男。そして満開のジャスミン、塀の上を飛び跳ねる雀、2匹の蝶がひらひらと戯れる様は、空の鏡に映った1匹の蝶にしか見えない。それら全てが在るべきところに在り、それぞれの運命を享受している—この事実が幸せの元になるのだと「私」は言う。ただし、この世界を正しく見るためには訓練が必要だと言っている。まさに彼女は非常に優れた眼を持っていたというべきである。「私」の眼を通して我々も正しく見ようとするならば努力が必要であるということを指摘し、見方を変えることの大切さを説くのである。そこには、決して読者を説得しようとする意図は感じられない。むしろ彼女の哀切のみが強く印象付けられる—この世の生きとし生けるもの全ての儂さに対して。取るに足らぬものをも愛しく想うことで、人は何と幸せになれるのであろうか。

風が吹きすさぶ / 夜が悲鳴を上げる / 木々の葉が落ちる。

これらについて誰か考えたことがあるだろうか

この夜について? / この風について? / この落ちる葉について?

(「エピグラム 9番」“Epigrama no. 9”)¹¹

幸せの種子は常にいたるところに在る。だからこそ人は、感性を働かせてその存在に、その大切さに気づくべきであり、それこそが幸せにつながる道であるとの理解を促すのだ。

11 *Melhores poemas*, p. 21

「孤独について」 (“Da solidão” p.31-33)

必要なのは孤独を理解することだ！

必要なのは、たとえそれが命を奪っていく苦汁に満ちた波だとしても受け入れることだ。

(「法則」 “Lei”)¹²

「世の中には孤独病で苦しむ人が多い。沈黙に襲われたとたん、また視界に人間がいなくなったとたんに、まるでこの世の終わりのように、人は深い嘆きにとらわれるようだ。しかしこの世に真の孤独はあるのだろうか。」と始まるこのクロニカは、その質問に否と答える。我々が絶対的な孤独に襲われることはまずないであろうと。もしそのように感じる人がいたとしたら、それは自分の五感を働かせていないからだというのだ。我々を取り巻く全てのものについて、昔の子供の眼に戻って見直してみよう。きっとそこには、我々の冷たい仕打ちにも屈せず、忍耐強く待っていてくれる全てがそこに在るはずだからと。「ああ、もし人間の孤独について文句があるなら、あなた方の周りに注意してごらん下さい。そこには際限なくあなたと言葉を交わしてくれる存在があるはずだから」。

「不確かな時代」 (“Tempo incerto” p.48-49)

この作品では、人間の浅はかさについて批判を下す。「人間達は人生のメカニズムをあまりにも困難なものにしてしまい、もう誰も確かなものが何かさえわからなくなっている (中略)。誠実な人の存在はもう信じられず、偽善者または無邪気と批判されないために、善人は良い行いをするのを恐れる。」今の世の中は、美德は馬鹿げた行為であり、悪意は善意の皮をかぶる—それが現実であり、過去の偉大な人々の行為さえ虚言ではなかったかと疑いたくさえなる世界なのだ。また各自が個人的な理由で正しいと思い込み、溢れかえる理性は狂気へとつながる。歩行者は道路の真ん中を歩く権利を訴え、運転手は歩道を走る。まさかと思われた電車でさえレールを外れ、泥棒は警察官の制服を着て、無実の人々を逮捕する。危険

¹² *Melhores poemas*, p. 170

だといわれていた拳銃はまるで小銭のように大勢の人のポケットに入っている。このようなカオスの世界で、一番価値の高いものは魂だ。そして悪魔は罰せられることもなく、我が物顔で世の中を横行するのだ。こんな不確かな時代を生きるには、人は頑強な自己を持っていなければならないだろう。彼女は理不尽な状況を矢継ぎ早に並べたことで、我々の世界が実際にかに狂気の刃になりやすいかを例証し、人々がこれを意識化するよう警鐘を鳴らしているのである。

「生粋の職人、ポルチナーリ」(“Portinari, o trabalhador” p.78-80)

現代絵画を代表する画家、カンディド・ポルチナーリ (Candido Portinari)¹³ に贈る鎮魂歌である。セシリアと同世代を生きたこの画家もわずか 60 歳でこの世を去っている。彼の深い信仰心と人間に対する慈愛に満ちた絵画は、多くの人を魅了し続けている。ポルチナーリの生家があるブロードウスキー市を筆者が訪れた際、この画家がいかに名声を得ようと、自分の故郷では「ただの人」であったということ、年老いて教会に行けなくなった祖母のためにだけ家の隣に小さいチャペルを建て、その壁に家族に似せた聖人を描いたことなどを知り、改めてこの画家の偉大さとその真摯な姿勢に感動したのである。同じ思いをセシリアも抱いたのではないか。「本物のアーティストは名声だけが一人歩きをし、不当なイメージを人々に与えてしまうものだ」とセシリアは嘆いている。しかしそれにもかかわらず、ポルチナーリはその生き様—全ての困難に静かに立ち向かう—を通して後世に教訓を与えているのだと述べている。ただ悲しいのは、もうこの世にいないということだ。その素晴らしい絵画の創作をやめてしまったことだ。亡き人を偲ぶ想いは確かに感じられるが、悲しみにただ浸るのではなく、自分の魂と呼応する芸術家が残した測り知れないものを賞賛するにとどまる。言葉にできない喪失感を、絵画は「彼の情熱そのものであり、私たちの喜びであったのに」と簡潔に結んでいる。そこに漂うのは、セシリアが死に対する「失うことに驚愕することもない」自然な姿なのである。

13 Candido Portinari 20 世紀を代表する、ブラジルの地と民を主なテーマとした画家。

「この世の終わり」(“O fim do mundo” p.81-83)

ハレー彗星が1910年に地球に接近したときの話である。「私」が初めてこの世の終わりということを知られたとき、世界はまだ「私」にとって意味のないものであり、その始まりも終わりも全く興味のないものだったのだ。この世の終わりが彗星のせいだと、泣き喚く大人の女性たちのことをぼんやりと覚えていただけである。「私」はまだグアバの木や絨毯の色彩で遊ぶだけの子供であった。ある日、真夜中に起こされてその彗星を見ることになった。それはとても素敵な「屋根の上に止まる白い孔雀」に見えたのだ。やがて彗星は去り、残されたのはこの世の終わりではなかったと喜ぶ大人と、彗星が消えたことを悲しむ子供だけだった。そして時は流れ、再度この世の終わりが訪れるというが、彗星のせいではないらしい。しかしそんな噂があるのなら、今この瞬間からもっと尊厳をもって残された時間を生きるべきであるとセシリアは言う。「まだ反省と後悔のための日々はあるのだ。」何もせずに過ごすことは愚かである。この世の終わりがまた噂だけでおわったとしても、「我々は一人残らず、いつでも終焉を迎えるときがくるのだから…」。彗星という大規模な要因で自分の世界が終わることと、生あるものが絶対的な死に向かうことと、大して変わりはない。このクロニカでは、彗星が警鐘を鳴らす役割を担っている一人は必ず生を終えるのだから、今を大切に生きろというメッセージである。

「夢を選んで」(“Escolha o seu sonho” p.116-117)

選集のタイトルにもなっているが、夢はセシリアの作品によく用いられるモチーフのひとつである。

芸術家が自分の作品に向けてそうするように、私達もそれぞれの夢を準備することができればいいのに。ひそやかな夜と私達の魂を題材にして、伝えることのできないその小さな傑作を作ることができればいいのに。それがバラよりも短く、夢を見ている瞬間だけ存在し、私達の記憶以外何も残さないまま消滅してしまうとしても。

夢の中ではどのようなことも可能である。たとえば古い歴史の街で、200年前からピアノのレッスンに励む遠慮がちで透明な少女の奏でる曲を

聴いたり、東洋にある野原にかかる孔雀の雲を見たり、海の真ん中にある公園で遊び、そして空腹の子供たちに蜜を運びその背中に乗せてくれるハチドリや蝶の群れと出会うことなどだ。また会ったことのない、でも会えたらよかったと思う人々—アレクサンダー王、ダヴィデ王、お釈迦様—と夢の中でお話することだ。そしてそれ以上に大切なことは、「近くに、また遠くに、生ある者、亡き者、私達が愛し知っている人たち…彼らと過ごした一番素敵な時の夢を見」ることである。つまり幻想的な空想でも無論楽しいが、自分の親しい人たちと見る夢に勝るものはないと、「私」は溜息をつくのである。

「クロニスタの悲しみ」(“Tristeza de cronista” p.118-120)

この作品を取り上げたのは、セシリア自身がクロニスタとして登場するからである。もちろんフィクションなのだが、彼女のクロニカに対する姿勢が伺えるのではないか。リオ市街を走る混雑したバスの中、二人のスタイリッシュな若者がしゃべっている。どうやら一人はリオを訪れるのが初めてで、もう一人は案内役のようだ。次に降りる停留所を確認した後、案内していた青年は、その通りにある有名なルイ・バルボザ (Rui Barbosa)¹⁴の家について説明し始める。でも相手は全く興味を示さない。さらに問いかげられると、「サンバの人だよね」という答えに黙ってしまう。二人がバスを降りた後、「私」は知り合いにこれでクロニカが一本書けるじゃないかと言われた。しかし「私」の答えはノーであった。

クロニカは既に出来上がっているわ。この混沌とした世界、定まらない思考を写しだしているでしょう？救いようはあるの？この混沌とした世界を整理できるのかしら。私たちが放り込まれたカオスについて無数のクロニカがあるけれど、そのカオスを修正しようとする気もない人たちに向かって書く意味があるのかしら？

知り合いは悲しそうな顔で溜息をついた。「私」も出口のないカオスに絶望しているのだ。休むことなく混沌とした世界に向けて警鐘を鳴らし続

14 Rui Barbosa 19世紀後半の政治家、文学者。ブラジル文学院の2代目院長。

け、しかし報われることのない現実無力感を感じて、弱音を吐いているようにも見受けられる。セシリアの人間くさを垣間見ることができる作品だ。

「完璧なる日々」(“Dias perfeitos”『魔法の窓』 p.28-29)

このクロニカはセシリアの世界観をもっとも浮き彫りにしているのではないと思われる。完璧な日々とは全てが自分の思う通りに実現するような日々ではない。では、どのような日を指しているのだろうか。雨が降るとの天気予報が、その通りになった日。逆に降るという予報がはずれ、傘とレインコートを持ち歩く必要がなくなったことで、なくしてしまうようなことがない日。朝起きると全ての時計が同じ時刻を指している日。交差点の信号機が壊れていない日。そしておまわりさんがきちんと決められた位置にいる日。誰にも足を踏まれない日。郵便局の窓口で真面目な職員に出会う日。つまり、彼らが私たちの向かって切手を放り投げるようなことのない日。バスが一方通行の通りをクラクションを鳴らしながら逆走しない日。そして、完璧な日々とは、帰宅すると家があるべきところにあり、平和で静かで幸せな眠りにつける日々のことだと結ぶ。つまり、全て―それがどんなに些細な出来事であったとしても―が在るべきところに収まっていることが完璧な日々につながるのである。このクロニカはブラジル社会に起こる日常的な出来事を紹介すると同時に、日々の取るに足らない小さな満足感を大切にすべきであると唱えている。「幸せになる術」でも述べたが、人間はいかに生きるべきであるかを彷彿させる作品である。

「クリスマスの買物」(“Compras de Natal”『魔法の窓』 p.36-37)

これはクリスマスの真の意味を問う作品である。クリスマスとは本来崇高な儀式だったはずではなかったのか、とセシリアは問いかける。街は競争するかのように光と色に溢れかえり、動かない天使や聖人、鳴らない鐘、偽の星を飾る。店は一年の現実から逃れるかのように、商業作戦でそれぞれ趣向を凝らす。これらの行為は全て2000年以上前にこの世を救うために生まれてきた御子を祝うためのものなのか。家人や友人に工夫を極めた風変りなプレゼント―しかし、それはうわべだけのものに過ぎない―を贈るために皆走り回るのだ、より高くより豪華なものを求めて。飢えを解消

すべく、1キロの米や豆をクリスマス・プレゼントとして贈ろうとは誰も思わない。色とりどりの箱や、絹を敷いたバスケットに入れられ素敵なりボンをかけられた小包を、満足そうに抱えて小走りに帰宅を急ぐ人の群れ。しかし、これは単なる幻想に過ぎず、全ては一時的な喜びでしかない。この時点で、厳かに神の御子を思い起こし、家族愛、兄弟愛、隣人愛を再認識すべく集うという、クリスマスの本来の意味は既に失われているのだから。この幻想の世界で唯一確かなのは、馬小屋からこの世界を見つめる神の御子だけだと、セシリアは静かに吐露する。だからこそ人間の本質に帰れと警鐘を鳴らすのである。

このクロニスタの眼は常に人間という存在を見据え、幼いころから身近にあった死と向き合ってきたからこそ、限りある生、命の儂さと物の世界が幻想であることに精通しているのだろう。そのような人生の中で享受してきたものすべてを彼女自身が慈しみながら叙述し、その中で読者にそっと反省を促す一決して押し付けがましくなく。これがセシリアのもっとも評価すべきスタイルである。選りすぐった美しい言葉の数々は、決して難しいものではない。しかし、シンプルであるがゆえ、なお力強く読者の心に響いていく。これこそがクロニカというジャンルが提唱する一つの特徴であり、セシリアによって見事に展開されてきたものである。

おわりに

20世紀初めに生まれたセシリア・メイレーレスは、近代化の波が押し寄せる世界を目の当たりにし、めまぐるしく変化する様を冷静かつ思慮深い眼で見つめ続けてきた。日々機械や物にどんどん支配され、人間性さえもが疑わしく思えるようになった世界に、彼女は警告を発する。感受性、人間の温かさ、魂の喪失について反省と危惧を唱えるのだ。読者の眼を日常の些細な出来事に向けさせ、眼には見えないしかし不可欠な人の感情のほんとうの真実の意味について説こうとする。

ドゥルモンはまた『夢を選んで』で次のように述べている。

日常の混沌、癖、勘違い、不条理について彼女が付する解釈には

流れるような美しさがある。非難する代わりに、控えめな、しかし優しい微笑で、悲痛ではないアイロニーをもって、語るのだ。世の中を騒がせることしかしない、見ることも親交を結ぶことも知らない者たちへの憐れみの微笑みを浮かべるのだ。

しかし、それは決して蔑んでいるわけではない。心から同情しているのだ。その姿勢は彼女の中で揺れ動くことはない。それゆえ彼女の作品は現在もなお読み継がれているのだ。

女流詩人として位置づけられるメイレーレスではあるが、その散文は彼女の世界観の魅力に溢れている。なかでもクロニカは、選びぬかれた語彙を鋭い感性で操り、それに加えて作者の人間に対する慈愛、敬意によって磨き上げられている。そのほとんどが散文詩と位置づけられてもいいと思われる。文学の役割が教え、楽しませ、そして浄化するものだと定義づけるとしたら、セシリアのクロニカは、その役割を十分に果たしているといえるのだ。

そしてまさに今日、メイレーレスが遥か昔から警告し続けた人間の本質的なものの喪失を、儂さのしくみを人々は痛感するのである。「完璧なる日々」では、毎日を完璧にするには、特別なことなど要しない。ただそれぞれが正しい位置に在り、与えられた役目を果たせばいいだけなのであると提唱する。彼女の作品に類出する言葉の一つに「受け入れる」(aceitar)がある。己の眼前に繰り広げられる事象をしっかりと見据え、そしてどれほど理不尽であろうとも、それを受け入れていくことこそが生をより豊かに生きる術だということだ。

ポルトガルの詩人、アルベルト・カエイロ (Alberto Caeiro)¹⁵の作品にも類似の詩がある。

すべてが現実であり、すべてが正しく在ることがいい
 どうせそれに不満を覚えても、そのようにしかならないからだ
 だから、今死ぬとすれば、喜んで死ぬであろう
 なぜなら、すべてが現実で、すべてが正しいからだ

15 Alberto Caeiro ポルトガルの現代を代表する詩人フェルナンド・ペソアの異名

嘆いているのでも、諦観を覚えているのでもない。ただ、自然体であるべきだと教えている。このように文学は、人生の先輩として、いかにによりよく生きるかを教えてくれる偉大な師である。しかし、セシリアが「幸せになる術」で説くように、このようなものの見方ができるよう、訓練しなければ人はただの盲人なのだ。そこから脱するための役割の一端を文学が担っていることは、言わずもがなではないだろうか。

この偉大な文学者の真摯なメッセージを代表すると思われる、簡潔だが意義深い詩で本稿に終止符を打ちたい。

このようなものになりなさい。
一穏やかで、公平で、忠実なるもの。(中略)

岩に挟まれ空中に静止する石のように—
終わりのない運命を支えたまま。
そして、穏やかで美しい雲のように—
存在として永遠に成就できないまま。

歌に燃え尽きる蟬のように
永い孤独を咀嚼する駱駝のように
世界の果てを目指す鳥のように
無邪気に死に向かう牛のように。

このようなものになりなさい。
一穏やかで、公平で、忠実なるもの。

その他の人間のようにではなく。

(「提案」“Sugestão”) ¹⁶

*ポルトガル語文献および引用したクロニカは、本稿のために筆者が翻訳したものである。

**クロニスタの氏名を「セシリア」と名前のほうで記述したのは、評論などでもそのように言及されているので、筆者もそれに従うことにした。

参考文献

- Barreto, Paulo, *Crônicas Efêmeras*, São Paulo, Oficina do livro, 2001.
- Bosi, Alfredo (org.), *História concisa da literatura brasileira*, São Paulo, Cultrix, 1977.
- Gouveia, Leila V.B.(Org.), *Ensaaios sobre Cecília Meireles*, São Paulo, Humanitas: Fapesp, 2007
- Meireles, Cecília, *Escolha o seu sonho*, 25ª ed., Rio de Janeiro, Record, 2002.
- Meireles, Cecília, *Janela Mágica*, São Paulo, Moderna, 1981.
- Meireles, Cecília, *O menino azul*, 1ª ed., São Paulo, Global, 2004.
- Meireles, Cecília, *Olhinhos de gato*, São Paulo, Moderna, 2003.
- Meireles, Cecília, *Melhores crônicas*, São Paulo, Global, 2003.
- Meireles, Cecília, *Os melhores poemas de Cecília Meireles*, seleção Maria Fernanda, 11ª ed., São Paulo, Global, 1999.
- Meireles, Cecília, *Crônicas de viagem 1*, Rio de Janeiro, Nova Fronteira, 1998.
- Meireles, Cecília, *Crônicas de viagem 2*, Rio de Janeiro, Nova Fronteira, 1999.
- Moisés, Massaud, *História da literatura brasileira*, vol.V, São Paulo, Cultrix, 1983-1989.
- Moisés, Massaud, *Pequeno dicionário da literatura brasileira*, 6.ed., São Paulo, Cultrix, 2001.
- Queirós, Bartolomeu Campos de, *As palavras voam-Antologia poética de Cecília Meireles*, 1ª ed., São Paulo, Moderna, 2005.
- Sá, Jorge de, *A crônica*, São Paulo, Ática, 2001.
- Santos, Joaquim Ferreira dos (org.), *As cem melhores crônicas brasilei-*

- ras*, Rio de Janeiro, Ed.Objetiva, 2007.
- Setor de Filologia da FCRB, *A crônica*, Campinas:Ed.Unicamp, Rio de Janeiro: Fundação Casa de Rui Barbosa, 1992.
- Sordi, Rose, *Magistrando a língua portuguesa*, São Paulo, Moderna, 1991.
- Stegagno-Picchio, Luciana, *História da literatura brasileira*, Rio de Janeiro, Nova Aguilar, 2004.
- Stern, Irwin, *Dictionary of Brazilian literature*, Westport, Connecticut, Greenwood Press, 1988.